



ダブルケア月間：ケアを中心とした社会へ

やました
山下

じゅんこ
順子

●英国ブリストル大学 社会学・政治学・国際学研究科 上級講師

「ダブルケアという言葉をご存知だろうか？」と始まるコラムを本誌に書いたのは、6年前になる¹。

今回は在住しているイギリスのことはお休みさせてもらい、相馬直子さん（横浜国立大学）と10年間行ってきたダブルケア研究と、今年から日本全国で始まるダブルケア月間について書きたい。

ダブルケア調査を始めたのは2012年である。高齢者介護と子育てを同時に行っている女性達の経験を把握する統計や資料がないこと、そして高齢者介護、子育て支援とそれぞれの制度は充実・展開してきたが、ダブルケアは制度の谷間にあることに気付いた。実態を知るため、ダブルケアをしている人たちを子育て支援センターや、子育てマガジン等を通して探し出し、話を聞くことから始まった。ダブルケアを介護と子育ての同時進行と定義したが、現場で話を聞いていくと、さまざまな形（兄妹と親や、子供と夫など）で複合的にケアに関わっている方々が多数いることがわかってきた。その後、晩婚化、高齢化、少子化、雇用の不安定化、そして共稼ぎ世帯の増加が進む東アジア諸国でのダブルケアの実態を比較するために、同じ質問票調査とインタビュー調査の質問項目を使って、日本、韓国、香港、台湾で調査を行った。

全国的調査（厚生労働省2016、内閣府2016、ソ

ニー生命2018）によれば、日本の女性ダブルケアの平均年齢は約41歳で6割が有職者、約2割がダブルケアのために労働時間を減らしている。調査を通して明らかになったのは、日本では女性にダブルケアの負担が集中していることだ²。東アジアの国々の中でも、日本は特に男性の家事・育児時間が短い。男性諸個人の意志だけでなく、長時間労働や不安定雇用など労働市場のあり方も、男性の家事・介護参加を難しくさせていることが背景にある。それでも、家族介護者における男性率は増えているが、介護者である男性は、女性（配偶者や姉妹）の支援をうけて介護をしている。一方で女性は介護・子育てを一人で背負っている割合が高い。その理由の一つに、ここ20年で主たる介護者の大多数が嫁から娘へと変化したことがあげられる。現実には娘介護が大多数となったとはいえ、現在30代・40代の親の時代は根強かった嫁が介護をするものだという規範の記憶は残っている。そのため、娘として親を介護する女性は、親の介護を一手に引き受け、実親を介護していることに文句をいわないことが夫の協力と考えている。

調査を始めてからの10年間、草の根でも、制度的にも、ダブルケアを取り巻く状況は変わってきた。厚生労働省が2016年に行なった調査によれば、ダブルケアを身近に感じると答えた人は、45.4%

1. 山下順子（2016）「ダブルケア：社会的認知を」『労働調査』2016年1月号：<https://www.rochokyo.gr.jp/articles/ab1601.pdf>

2. 詳しくは、相馬直子・山下順子（2020）『ひとりでやらない 育児・介護のダブルケア』ポプラ社



ダブルケア月間ホームページ (<https://wcaremonthly.jimdofree.com/>)

にのぼる。私たちの調査にご協力くださった方々が、地域に根ざしたダブルケアの活動を現場で地道に広めて下さった。子育て支援センターや、地域包括支援センターでのダブルケアカフェや、ダブルケア相談窓口が開設された市区町村もある。子育て支援の現場や高齢者介護の現場で、ダブルケアの認識が広がることによって、ダブルケア家庭への連携した支援が行われているケースもある。また、昨年度から各地で重層型支援体制整備事業が取り組まれている。この事業は、ダブルケアのような複合的な課題を、多機関の連携とアウトリーチや「伴走型」(継続的)支援によって、支えることを目的とする。事業が機能・持続するためには、連携にかかる専門家の労力の評価や地域間格差の是正など課題はある。しかし、子育て、介護、貧困、障害と縦割り制度の谷間にダブルケアがあると痛感させられた研究開始当初から、日本の社会制度も多機関の連携にもとづく、包括的なアプローチへと展開していることは感慨深い。

ダブルケア月間は、各地でダブルケアのことを知ってもらおうと、それぞれの地域で活動している方々が運営委員となり、今後毎年2(ダブル)月に、全国的にダブルケアの認知活動をさらに展開していくことを目的としている³。クラウドファンディングで集まった資金で、初年度となる今

年は、ダブルケアの支援者となる各領域の専門家にダブルケアのことを知ってもらうため、オンラインでのトークセッションや重層型支援体制整備事業の勉強会など、様々なイベントが企画されている。

ケアは人間関係がその中心にあり、人間によってなされる部分が大きく、AIやテクノロジーの進化があっても縮小されることの少ない産業である。社会においてケアに無縁な人はいない。私たちはケアを受けたがゆえに存在している。もし誰かが、ケアすることから免除されているのであれば(例えば仕事があるからなど)、そのケアは他の誰かによってなされているのだ。

コロナ感染症の拡大は、ケアが社会、政治、経済の基盤にあることを明らかにした。一方で、コロナ禍で膨れ上がったケアへの対応や負担をどうするかについては、国会でもほとんど議論されることもなく、家族、特に女性頼みとなってきた。そしてダブルケアの問題は、ケアを受けられない人の孤立やケアすることを困難にする貧困ともつながっている。ダブルケアの幅広い周知をめざすダブルケア月間は、誰もが十分にそして公平にケアされる社会、ケアすることが尊重される社会を構想していくための、地道な一歩になるだろう。

3. ダブルケア月間については、こちらのホームページを参照ください：<https://camp-fire.jp/projects/view/497519?fbclid=IwAR1-u7h-aZhyo1ascxi5BM39yazNLU57fUVWfWbC1zkQQrQyINvouS7L3w>